



金子光晴全集



第十卷

日本財団支援

笹川良一記念文庫

財団法人日本科学協会

金子光晴全集 第十卷 著者金子光晴 装幀者司修 発行者高
梨茂 印刷者山田博 発行所東京都中央区京橋二丁目一 中央公
論社 電話(五六二)五九二一 振替東京二一三四 ©一九七六
昭和五十一年一月十日印刷
昭和五十一年一月二十日発行



評論

I

目次

現代詩入門

はしがき

詩とは？

詩の本体

西洋の詩

日本の詩

詩作法

詩の解説

現代詩の鑑賞

61	47	38	27	23	19	12	11	9
----	----	----	----	----	----	----	----	---

象徴派を鑑賞しながら

翻訳詩の影響

日本の月光派の詩人たち

白秋の光明礼讃とその影響

フランスのエレガンス的傾向

新しいダンディズム出現

大正末期の諸傾向

僕が詩を作りはじめた頃

ポール・フォールの影響

民衆詩派の横行

『白樺』をつぐものたち

生の詩人エミール・エルハアラン

現代詩の鑑賞

現代詩とは

『抒情詩』以後

63

63

76

89

98

107

124

124

134

138

142

148

159

159

162

『四季』の人たち

戦後の詩

跋 文

作詩法入門

詩とはなにか（上）

詩とはなにか（下）

詩人とはどんな人間か

日本と外国の詩人の評価の違い

作詩にあたっての十個条

美と政治と詩人

幫間詩人と反逆詩人

アンガジエとデガジエ

詩と自然

詩と人間

愛誦詩歌

あとがき

愛と詩ものがたり

小序

序 説 模倣のすすめ

第一章 優雅について

第二章 芽立ちの愛

第三章 旅について

第四章 誠実と道化

第五章 よろこびとかなしみ（上）

第六章 よろこびとかなしみ（下）

第七章 孤高の精神

第八章 日本のさびしさについて

第九章 生活の愛について

第十章 自然の愛について

第十一章 人類愛について

第十二章 集団その他の愛情について

総論

跋

後記

382

380 376 370 362 356 349 343

現代詩入門

——詩をつくる人に——

はしがき

詩の入門書を書けと、安東君に言われ、安東君と分担して書くことになった。入門書のようなものは書いたことがないから、僕は自信がないが、若くて、熱心な安東君がついてくるから、むずかしいところは安東君におしつけて、ごく概略な、いわば僕が詩を作ってきた年月の経験から割り出したことだけを平易に書いて、これから詩を作ってゆこうという人たちに、何らかの意味で参考になったらと意図している次第である。

本当にためになることは、安東君が具体的に、委細にわたって書いているから、この方は、推奨するに足るものと思う。

一人の意見よりも、時代をへだてた二人の意見が、どんなふうに合致し、どんなふうにすぎまがあるかが、この本の面白いところであるが、読者は、その分れ道で迷ったりする必要はない。年代の近い安東君の方の説を、そんな場合は、ちゅうちょなく支持された方がいい。大略の眺望のための——距離を作ることが、僕が、役目のようにみうけられるからで、その限界からあまり接近しては、かえって、読者諸君を邪道

に導くことになりはしまいかと思うのである。

一九五四年三月

金子光晴

詩とは？

日ざしが和らいで縁先にさしこんでいる、小春日和のあたかい日のこと、高慢先生は、木椅子を横にして、客と先程から歓談している。

主人 それで、なにがわからんのですか。君は。

客 では一つ遠慮のないところを言わせてもらいます。僕ら門外漢には、近頃の詩というものがとんとわからんのです。むかしの詩には、インリツがあつて、読んでいても自然心がはずみ、成程詩をよんだという気がするのですが、近頃の詩ときたらのべたらで散文をよむのとかわりなく、散文ならまだ、すらすらとよんでイミのわかるものを、妙に行があいていたり、短かかったり長かったり、ゴツゴツとしてよみにくいことこの上なし。その上、書いてあることが唐人の寝言で、まるで連絡がつかないのです。これは僕一人の感想ではないでしょう。今日は日も永いことですから、一つ、ゆるゆると先生に御説明を願おうと思つて……

主人 成程、御説いちいち御もつともですな。おっしゃる

通り今日は休日だし、他に所在もないからちよいどいい、納得のゆくようになにかお話しすることにしましょう。ところで今、この頃の詩をよんだといわれたが、それはどんな詩です。

客 いや、別に……まとまったものをよんでいるわけではありませんが、雑誌などに時々、はさまっている詩、それから、僕の息子などが、どこで見まねてくるのか、てんでわけのわからないものを作つて、詩だなんて言つてみせるんです。しかし、わからない点では、いずれも共通なのです。

主人 それで、さっきおっしゃつたむかしの詩というのはどういふので？

客 さあ。そう改まつておっしゃられると困つてしまうんですが、まあ、なんですね。僕らが詩と考へていた従来のありふれた詩で、近頃の詩人先生からは、そんなものはない詩ではないなんて叱られるかもしれませんからね。まあ、『唐詩選』の詩とか、西洋では、ワーズワースとか、ゲーテとか、日本の詩では、藤村とか、白秋とか、名の通つた人たちの詩のことを大きく概括して申しあげたわけなのです。それに、和歌や俳句のようなものも、やっぱり詩とみていいのではないですか。

主人 そうですとも。

客 僕の少年時代には、白居易の「琵琶行」や「長恨歌」

を涙をながして愛誦したものです。和歌や、俳句もかじったことがあります。こうみえてもなかなか感傷的な少年で、牧水や、啄木に心酔しました。藤村はその割りに食いつきませんでした。白秋の『思ひ出』や『邪宗門』の芳香高い作品にも魅せられたものでした。

そんなわけで、じぶんでも詩がわからないなどと思ったことはありませんでしたが、……

主人 なかなか有縁の人じゃありませんか。白秋、露風に心酔するようでは、その次の時代、萩原朔太郎や日夏耿之介の詩もよんだでしょう。そこまではついてゆけたんじゃないありませんか。

客 そうです。まんざら、なにもかも理解を絶しているというわけではありません。現代の人でも、わかる人もあります。例えば三好達治先生など……

主人 ほほう。とすると、先程おっしゃった言葉は一種の逆説なんですね。どうして、どうして、あなた自身立派に意見をもっておいでで、その意見の遠慮勝ちで自信たっぷりな提出のなさりかたであったわけですね。

客 決して、決して、そんな傲慢な気持は少しもありません。

主人 わかりました。これを要するに、つまり、御意見によると、現代の詩が日本語の従来のリズム、七五調、ないし

五七調に適應されないため、リズム的快感が少しも感じられないというわけですね。そして今日のような詩のかわりかたを進歩とはみなすことが出来ず、退化墮落という風にお考えなのですね。

客 そ、そんな、そんなことを言い切る勇氣は持ち合わせておりません。

主人 あなたのような御意見の方がここに四、五人も集まっていられたら、あなたの勇氣は百倍するでしょう。

客 俗論に阿おもるというやつですか。いわゆる……

主人 失礼。四、五人も集まるといふ言いかたが言いすぎだったのですな。それでは、照應するに足る外国文学者の意見でもあったらということにしておきましょう。

主人は、煙草の火をつけて煙をふかくすいこんで、ふうっとふいた。

主人 さあ、今までのお話ですと、現代の詩を非詩と言わないまでも、あなたを感動させるに足るものでなかったということになりすな。それでは一つ、しばらくをぐっとひらいて、詩とは何ぞやという問題をもってきてみるとしましょう。一くちに詩と言いますがこれをひろい意味における詩と、狭義の詩とにわけて考えることができます。もっとも広範圏に「詩」という場合、僕たちの情感を通じてながめる周囲のいっさい、宇宙の四大運行に伴う諸現象はことごとく詩、

ないしは、詩のための素材でないものはないと言えましよう。僕たち人間生活の書かれた記録、書かれざる歴史、総じて自然の大きな流れのなかに、浮きつしずみつして移ってゆく大小の出来事、それらのことにふれた人間の感動を伴う律動的な言語表現を、かざられた意味の「詩」と通常よびなしているようです。詩についての説明のしかたはいろいろあるようですが、まず、こんなところが、むかしから通用している定説のようですな。

客（あくびをかみころして）それで？……

主人 僕は、なにもここで一般的な詩の定義をしようと思はっているわけではありませんから、そのことについて、これ以上ふかく追究しようとはおもいません。なお、そのことについて専門的に知りたいとお思いなら、大英百科辞典の詩の項でもひくのが早道です。どうです、一つ、ひらいてみませんか。

主人が書棚の方に目をうつし、立ち上がろうとするのを、客は、あわてておし止め、

客 いや、わかりました。いずれ、それはじぶんでゆっくりひいてみますから、どうぞその次をつづけて下さい。

主人 実際、一つのを定義するのは、それがわかりきっている場合、一層むずかしいのですよ。人間とは何ぞやという質問に対して、百人百様の諸説がでも、なお充分で

はないでしようよ。詩についての基本的な諸説も、これが適確というような説は、百代の後になってもえられないでしょう。ギリシャのアリストテレスから今日まで、どれだけの詩について論議されてきたでしようか。それでもなお詩学にたよって、詩の本体をしっかりと把握した人があるということを引きません。

客 すると、詩は説明できないものだということになりそうですね。

主人 そうですね。少なくとも、詩を抽象的に、観念論的に定着させた理論というものは詩の実体をつかむ手がかりとしては、かえって不便なものだと思いますよ。そうした考えかたが、今日の詩をわからなくさせている原因なのではないでしょうか。詩の魅力を魅力として永遠化して考える傾向の古来の鑑賞家達は、迷妄な神秘主義者とえらぶところのない結果を来たし、詩美すらが歴史的條件とともにうつり変わるものであることを決して肯んじようとはしないものです。

客 僕らもつまり、その頑冥の徒の一人とおっしゃるわけですか。

主人 怒っては困りますよ。あなたのことをあてつけたりする気は毛頭ないのですから。どんなすぐれた傑作でも、その時代の諸条件のもとで生きているので、シェークスピアはあくまで、イギリス、エリザベス朝の文豪です。現代がいく